

近代文学研究叢書

第三卷

昭和31年6月5日 印刷
昭和31年6月10日 出版
昭和48年9月15日 二刷出版

[¥ 2500]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目一〇番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(四二)五一三一〇八番

近代文学研究叢書

第 三 卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本保人浜能成内辻玉島山佐佐笹佐坂木河金片荻岡太上石石池

田松間見勢瀬井田伯藤沉々本麟子桐原田井森田田
坂徳藤村宮木由俣井保三磯延吉亀
澄定久円頼正幸禮梅幹美八五実健顯泉

夫孝雄都吉郎賢勝濯鑑助二允友二明郎郎修英二智水生郎吉男貞鑑

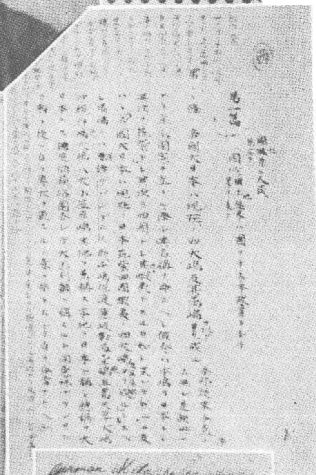
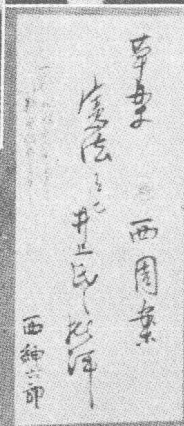
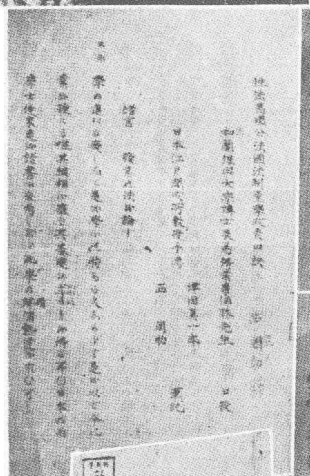
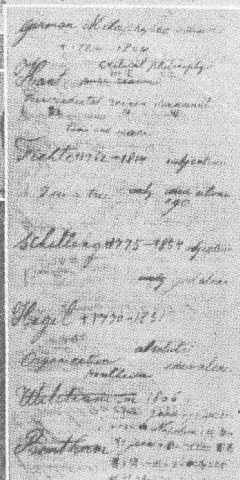
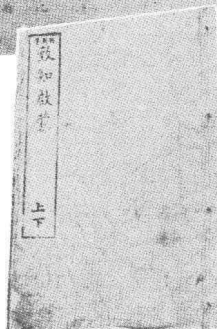
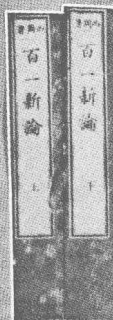
(国語学) (近代文学) (近代文学) (近代文学) (美文学) (国語学) (近代文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (英文学) (和歌文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英文学) (児童文学) (国文学) (国文学)

西周の肖像 →

(大久保利謙氏蔵)

西周の旧居。幼時この土蔵
の中で勉強したという。

西周の肖像入り切手

憲法草案
(国会図書館蔵)西周が津田真道とオランダ留学中フイセリングから
受けた五科義講の総論第一頁。(国会図書館蔵)西周の筆蹟(小型和綴書)
(国会図書館蔵)生性発越第一巻
表紙
(国会図書館蔵)

「百一新論」上、下

(昭和女子大学蔵)

「致知啓蒙」上、下

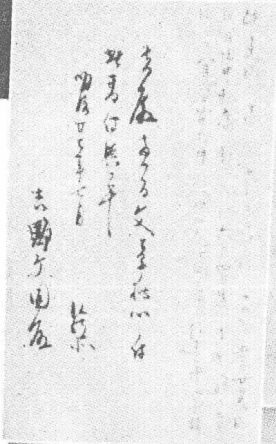
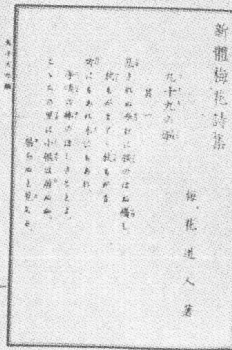
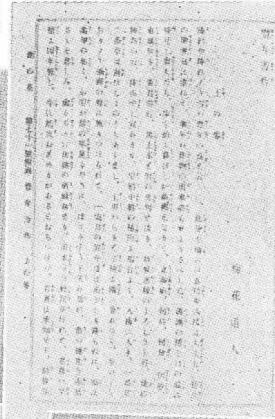
(昭和女子大学蔵)

花 梅 西 中

恭 弘 木 鈴

「梅の花」明治二十四年
九月号所載の梅花の小説
「豊年万作」本文と挿絵
(昭和女子大学蔵)

「新休梅花詩集」——明治二十四年三月刊
(昭和女子大学蔵)



↑ 弘恭の「ふみがたり」草稿
(静嘉堂文庫蔵)

→

森田黒新に宛てた
梅花の手紙
(昭和女子大学蔵)



梅花館居——岐阜県
虎塚山永保寺、獅子窟

紫式部日記傍註
上

鈴木弘恭著
新日本文学史略 全一
東京 青山堂出版

弘恭著「日本文学史略」——明治二十五年十月刊。
わが国最初の文学史と思われる(昭和女子大学蔵)

弘恭書「紫式部日記傍註」——明治三十年三月刊。(静嘉堂文庫蔵)

田 澤 稻 舟

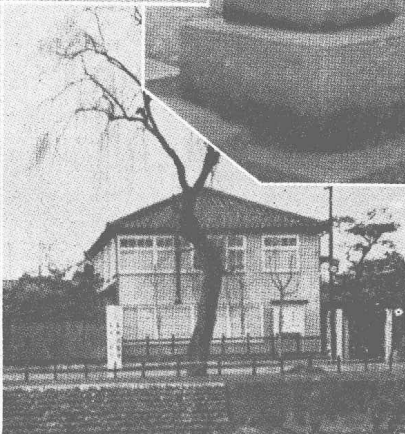
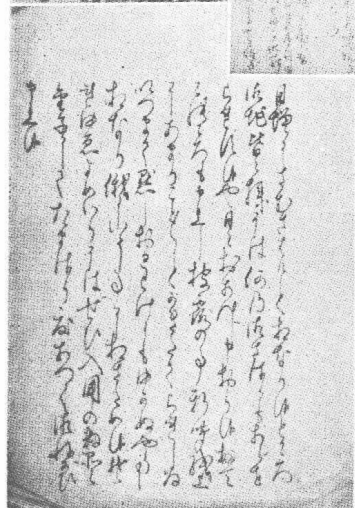
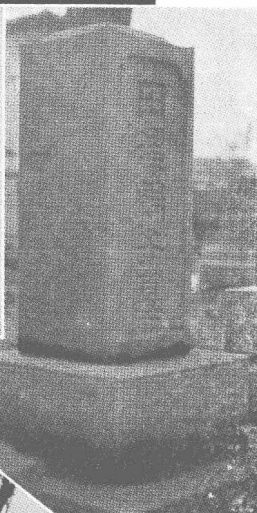
稻舟肖像，二十才前と思われる。当時流行の袴どめが見える。(田沢康子氏蔵) ↓



稻舟自筆の絵と書(田沢康子氏蔵) →



稻舟の墓 鶴岡市日和町、般若寺境内。 ↓
「美妙日記」(墓の左)。雑記帳に記したもので、写真は明治廿四年十二月の項。(塩田良平氏蔵)



鶴岡の実家に宛てた稻舟自筆の手紙草稿(明治廿八年末頃)。(塩田良平氏蔵)

鶴岡市五日町田沢家旧跡。根淵市五日町田沢家旧跡。二階現建は津本はその後新築されたもの。

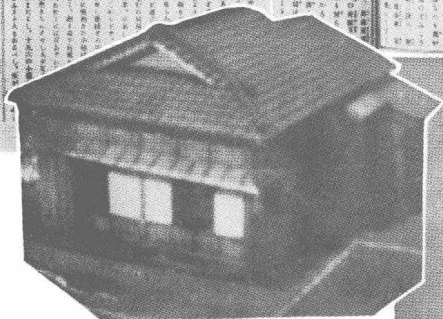
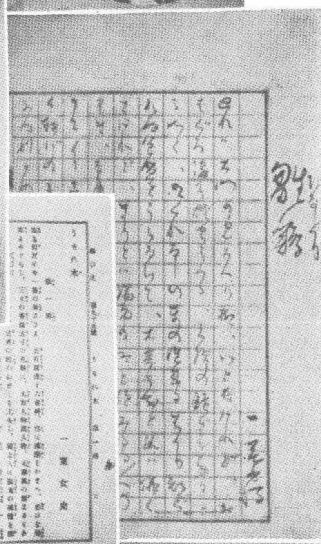
樋 口 一 葉

中島勉の才媛達。三列目左から四人目樋口一葉。
一人おいて右が中島歌子。(樋口悦氏蔵)



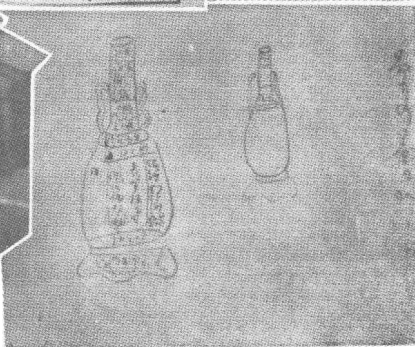
「たけくらべ」の下原稿「雛鳥」
(樋口悦氏蔵)
↓
一葉(向って右)と妹邦子。年令不詳。

「うもれ木」「都の花」九十五号
所載。(昭和女子大学蔵)
「十三夜」一文芸倶楽部第一巻第
十二編(明二八・一二)関秀小説所載。
「たけくらべ」文学界明治二十八年一月号所載。
(昭和女子大学蔵)



↑丸山福山町の一葉
旧居の模型。
(塩田良平氏蔵)

明治二十四年六月から書いた
「筆すさび」の中の「うもれ
木」中に描いた陶器に関する
図解。(樋口悦氏蔵) →



ゴ ー ブ ル

ゴ ー ブ ル 夫 人 の 碑
↓ (横浜市, 山手外人墓地)

ゴ ー ブ ル から ベネット 博士 に 宛 て た 手 紙
1893年9月10日 (高谷道男氏蔵)

ゴ ー ブ ル と 夫 人
エ リ ザ ・ ウ ィ ー ク ス
(高谷道男氏蔵)



I have written several times to Dr. Weeks
but have received no response. Please give
my kind remembrance if still in Yokohama. Also
to Mr. Weeks' family and family.
Very sincerely and fraternally yours
Jonathan Goble.

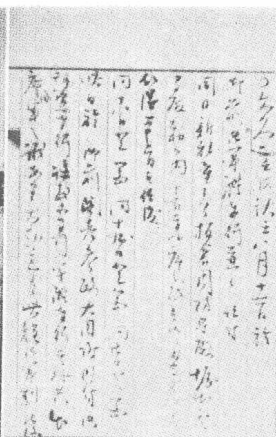
東神奈川の成仏寺
跡 (本書第一巻日
録「ブラウン」を
参照)

勝海舟

長崎伝書所時代の海舟
(一又正雄氏蔵)



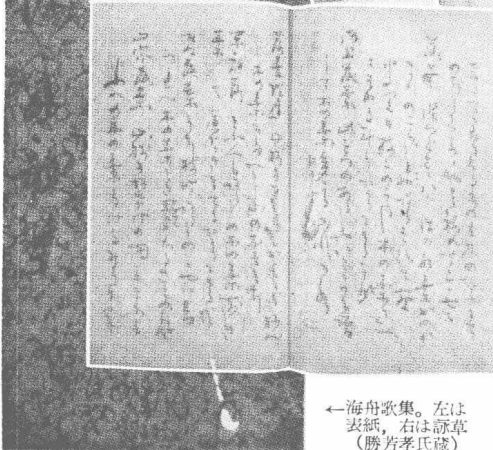
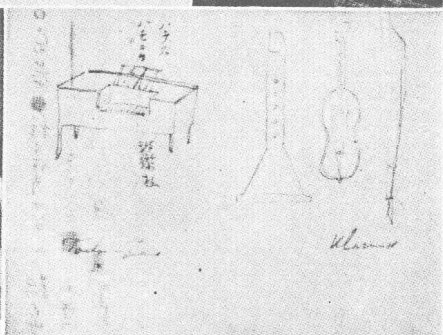
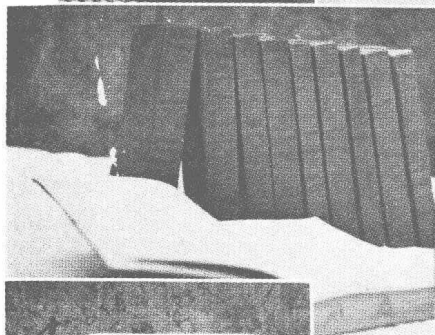
海舟日記第一号第一頁
(勝芳孝氏蔵)



海軍時代の海舟
(一又正雄氏蔵)



和蘭辞書ゾーフハルマの筆写本十冊
(勝芳孝氏蔵)



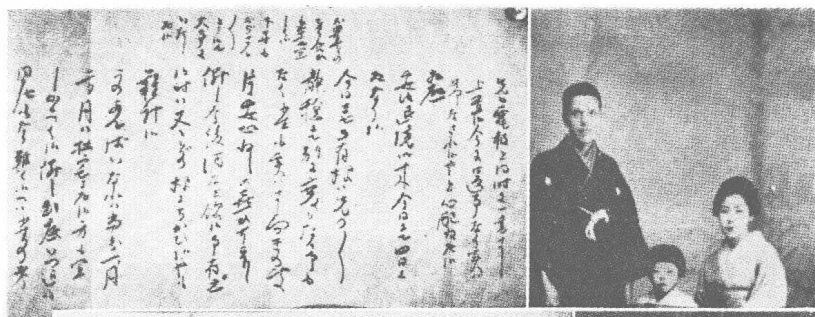
←海舟歌集。左は表紙、右は詠草
(勝芳孝氏蔵)



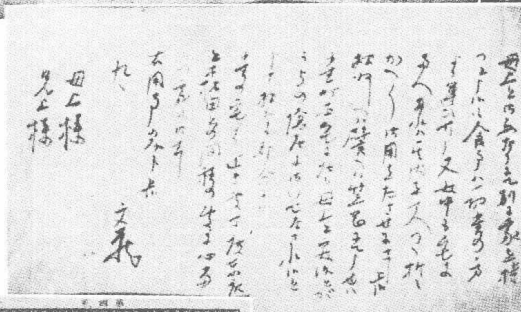
上 海舟雑記第九号、楽器に関する頁
(勝芳孝氏蔵)

下 海舟の「吹塵録」上下及び余録の表紙と上巻序の末頁
(昭和女子大学蔵)

思軒、夫人、長女下子



郷里等閑の母、兄宛の思軒自筆の手紙。(昭和女子大学蔵)



思軒の翻訳書

(左から) 「蕃使者」一明治二十一年五月刊。 「十五年」

一明治二十九年十二月刊。

(右上から) 「無名氏」一明治三十一年九月刊。

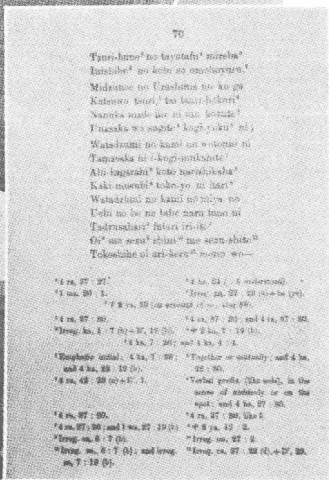
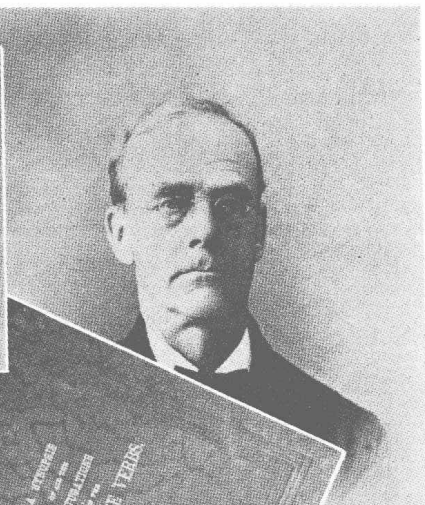
「世界一大奇聞」一明治二十年五月刊。

(昭和女子大学蔵)

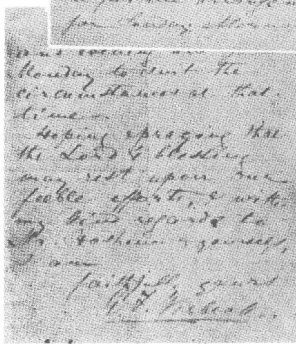
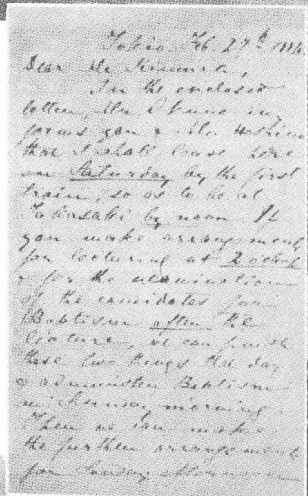
ヴァーベック

明治天皇から下賜された勅語
(笹尾参太郎氏蔵)

ヴァーベック肖像
(高谷道男氏蔵)



福州の木村熊次氏宛ヴァーベック書簡、一八八四年
(明治十七年)二月二十七日付。要点にアンダライン
したのも、紙面な性格がしのばれる。(木村毅氏蔵)



青山墓地西第四標にあるヴ
アーベックの墓

A Synopsis of All the Conjugations of the Japanese Verbs, 1887.
日本語の動詞活用の研究であるが今まで彼の著書としてあげられていない。左上はその表紙、本文上段は例文「浦島」で、下段に動詞の活用を示している。(明治学院図書館蔵)

目次

口	第三卷の成立	昭和女子大学 近代文学研究室	(一三)
凡	例	昭和女子大学 編集室	(一六)
田	澤 稻 舟		(一九)
樋	口 一 葉		(六一)
西	周		(一〇七)
鈴	木 弘 恭		(一四五)
森	田 思 野		(一九三)
G・F・ウ	アーベック		(二四三)
J・ゴ	ーブル		(二九一)
中	西 梅 花		(三三一)
勝	海 舟		(三七三)
「餞	の 言 葉」	北村正次郎・内野五郎・野町二・宮内秀雄 杉山炯火・水之江有隣・光井武八郎・近石泰秋 所 勇・伊藤正雄・緒方惟精	(一)
「第一	卷批評(続)」		(五)

第三卷の成立

本巻は明治二十九年から同三十二年の間に逝去した文人九名に関する研究録を収めた。早世のために記録の少ない田澤稻舟や中西梅花、活動分野が広がったため反って印象を稀薄にした西周、よいグループを持たなかった故に忘れられた鈴木弘恭、外人なるがために交際範囲が狭くかつ浅かったヴァーベックやゴープルなどは、今のような惣忙の世の中では見落されないとも限らないであろう。が、幸にしてグループの支持を受けた樋口一葉や森田思軒、地位に恵まれた勝海舟などは日当りのよい人々で、その生涯も業績も遺憾なく認められて既に史上の人となっている。史上の人となる、ならぬは本人等には無意味であるが、文化現象を研究する人には傷ましい盲点である。由来ジャーナリズムやグループの力に支配され易い近代文化人や文学者には兎角あり勝ちな陰晴である。この陰晴にも公正なレンズをあてて本来の姿を照射し乍ら史実を正確に究明したい。そのために努力している執筆者諸氏の所感を左のように収めて本巻成立の一端に触れる。

田澤稻舟 明治二十八年末に結婚、二十九年三月に離婚し、六月「月にうたふさんげの一ふし」の読売新聞への投稿、そして九月の死といった事件の余聞、反響を当時の新聞、雑誌で辿って行くのであるが、六十年積った塵埃、ぼろぼろにくずれた表紙、独特の悪臭——。連日図書館に籠って僅か一、二行の記事を見出した時の喜びはむしろおののきに近い。明治二十年一月に調査した学齡児童名簿が発見されながら、稻舟の住んでい

た五日町方面の記載だけが無かったり、明治二十三年二月起の学齡名簿には、明治八年十月生れからの者の全町内の就学状況が記載されているが、稻舟はわずか一年の違いで不明なのである。（本学研究室・谷地玲子）

樋口一葉 三宅花園の想い出に「お世辞の実にいいこと、それは最う人を逸さない——客待遇の実に上手な人でした、抜目のない、気のおけない、まあ下町風と言った様で、何か慥う人に摺り付くやうにして物を言ふ、（中略）逆境の人でしたから、妙に僻んだ感情を持つて居りました。歌子先生の処に居った頃から（略）例の皮肉な觀察は宜しうございますが、中には誤解や僻みに思はれる事も尠くないのです」（女学世界の冷淡と云うより競争者として挑む感があるのと、同じく「打とけて語りあひし事もありき、されど此君の何事にも少しく心ぐせの見ゆるを、境遇の為す業と知りつゝ、我心にそはず思ひし事も多かりければ、夏ちゃん強者よといひ放てば、エ、私どうでこんなのです、と大きな眼のうるはしきにこぼるゝ計り露をやどして」（真筆版「たけくらべ」）とのように同一人の人物評にさえ、表裏一定しないなどの事もある。（本学書記・高津和子）

西周 には哲学、文学、心理学、翻訳、或いは海軍の軍制上の教育者として、また晩年には学士会院長などその業績があまりにも広汎にわたっている。啓蒙期とは言うものの、研究の対象となる学問の焦点をどのように纏めたらよいか、まずペンをもつ前に考えさせられた。しかし彼の資料の殆んど大部分が国会図書館に収められ、自筆の原稿がそのままに保存されているなど嬉しい限であった。漢文の草体書きにも時代の推移を感じさせられたわけである。（本学高校教諭・高松三枝）

鈴木弘恭 訪問の際前田氏に除籍簿の写しをお目につけたために弘恭長男弘道の妻たちの実家がわかり、前

田氏の案内で同家を訪ね、遺族及墓地をしる事が出来、夕方墓参をすませ、ようやくして弘恭伝記の端緒をつかみ得た。このように役立った除籍簿だが墓地については小石川白山竜雲院とあり、「大八洲雜誌」には谷中鉄舟寺とあったが何れも誤記で、実際は水戸市千波町円通寺境内であった。今度の経験のみではないが又しても文献のみによる事の危険を身をもって体験し、確率の乏しい文献が世をあやまる事を知ると同時に、労を惜しんで誤を重ねる事のないように努めねばならぬと思った。(本学短期大学講師・瀧沢典子)

森田思軒 翻譯が政治家の余技をはなれて、文学者の仕事に移ったのは森田思軒の卓抜した翻譯技術に負うところが大きい。和漢洋の該博な素養による神采的文章力と、周密文体は画期的な業績である。彼に「レ・ミゼラブル」を訳させて見たかった。(本学研究室・湯田純江)

ヴァーベック 外人の場合は遺族の現状が殆んどわからない。宗教、学校関係、墓地等を調べたが、一向に判明せず、ヴァーベックの長男が軍人になったとの事から万一を願って米国大使館に行ったのが好運であった。館内の事務は多数の室に分れているので、受付を通じて各室にたずねたが、全然分らない。かつ古い書類はないとの事、一時は失望したが、最後にたずねた人物交流課の好意と同館図書室で、ヴァーベックの子孫の略歴並に長男ウィリアム氏の現職業、住所をも知り得た。(本学司書・小尾寿子)

ゴープル 一八七二年横浜で開かれた我国最初の宣教師会議で話題にのぼった日本語讚美歌はゴープルの *There is a happy land*. (あまひみくにはいとたのし) とクロスビー (J. N. Crosby) の *Jesus loves me* (主我を愛す) の二つであった。ゴープル訳は正木護の報告書に「ヨキ土地アリマス、タイソウ遠方、尊者榮華ニ

立ッ、日出ノヤウ」とあるが、ゴーブルが一八九三年米国から横浜バプテスト神学校のA・Aベネット博士宛ての手紙によると「よいとちこざります。たいそう あんばう せいじん ぬいよにたつ たのしも」とあり、日本最初の讃美歌である彼の訳詩はたど／＼しいものであった。（本学研究室・小野寺和子）

中西梅花 本間久雄博士の戸籍簿（淺草区役所）調査から生歿年月日が明らかにされたが、更に生地について確証を得たいものと淺草区役所で除籍簿を広範圍にわたって見せてもらった。明治二十六年梅花に家督を譲った父済里の除籍簿六冊、つづいてそれ以前の四冊がみつかった。その中で一番古い除籍簿（明治十五年）に「十四年十二月二十八日北豊島郡千住南組四十六番ヨリ入ル」と記入されてあった。それが柳田泉教授の「菓鴨病院日誌」による「千住小塚原」という推定説を裏づける資料ではなからうかと思つた。（本学編集室・黒田美代子）

勝海舟 「海舟座談」（巖本善治編）には「糸子どのが所持せらるゝ掛もの、静岡に行かれし頃の作にて、訳詩と思はるゝ歌」とあるのを発見したので年譜を調べたところ、明治元年（四十六才）と明治二年（四十七才）静岡に行つていて、それ以前に静岡に滞在したことは「海舟全集」の年譜には見当たらないが、四十六、七才は既に初老（当時の年齢観）と云うべきで「壮齡の頃」の記事と矛盾を生ずる。従つて「静岡に行かれし頃」は年譜では見当たらないが、静岡にはしばしば行つたのであらう。（本学研究室・布施明子）

以上のようにして第三巻の原稿は出来たのであるが、この他に先学の研究、論考並に各位の示教、遺友、遺弟、遺族、郷人各位が貴重な資料と便宜を与えられたこと各稿末に記す通りで感謝に堪えない。殊に好意と理解に充ちた書評は関係者一同の感謝するところである。（昭和三十一年五月三十日 昭和女子大学近代文学研究室）